

「家がいいね」 第3号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2004.8.5

当院が最も大切に考えているのは、病院から自宅へ帰りたい希望を実現することです。今号は開院2年間の、在宅医療患者さん150名余の方々のまとめを書き出してみたいと思います。

電話相談から在宅医療が始まります

直接に来院されて相談する方もおられますが、大半は入院中の病院からの問い合わせです。末期がんを受け入れるため、伊勢病院や日赤からの相談が、それぞれ40名ほどありました。いずれも医療相談室の医療ソーシャルワーカーさんが、立ちをしてくれると、主治医さんや病棟看護婦さんとの退院打ち合わせもスムーズに進むようです。近隣の病院・開業医さん7施設からも、計30名の紹介がありました。寝たきりの身体不自由の方が大半です。

地域のケアマネージャーから20名、介護関連施設からも7名の相談があり、主として痴呆のケースでした。遠方よりは、愛知県がんセンター、三重大学病院、済生会松阪病院、松阪厚生病院より紹介の方もありました。

受け入れの方の主な病気はどうでしょうか

がん患者さんが45名と多くを占めます。多くは自分の病名を知り、受け止めておられます。脳梗塞の方が30名、痴呆の方が20名、少しずつ生活のリズムを取り戻します。心不全・腎不全・肝不全という機能不全の方が合わせて20名余、病気というより高齢の障害という方も15名余、神経難病の方が5名、精神疾患の方が3名、脊髄損傷や圧迫骨折の方が各1名。

在宅生活のゆくえ

自宅での生活をまっとうされた方が、51名、何らかの都合で病院へ戻る選択をした方が21名、

そのうち病院で亡くなられた方は16名と聞いています。また、介護施設へ戻られる選択をした方は12名おられました。それぞれの選択の中で、自宅での生活は、かけがえのない日々と思われました。

人は自分の物語を一生をかけて完成する

がんに限らず、死には基本的な違いはありません、と前に言いました。高齢の方を自宅で看取るお手伝いをしたことが印象に残ります。自然に衰えてゆく身体を、点滴も胃ろうも使わずに世話をしながら、その方や家族の物語が成就する時間が流れます。あえて病名を探すのではなく、「老衰」と診断書に記載できるのは、嬉しい贈り物です。7月29日夜に、老人保健施設での家族会に参加して、「最期に悔いの無い日々が過ぎせた」との感想を直にお聞きすることが出来たのは、この先のなによりの励ましになりました。

スタッフを紹介します



大西です。



倉野です。



西岡です。



中川です。



羽根です。



遠藤です。

竹村です。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805

三重県度会郡御園村高向 927

電話 0596-20-8104

ファクス 0596-20-8105

mail homecare@kr.tcp-ip.or.jp

HP <http://tcp-ip.or.jp/~takuro>